

北京自主独立教会とロンドン会 — 1920年代に老舎の関わった北京の 教会学校をめぐって—

高橋 由利子

一. はじめに

1.1. 老舎とキリスト教

老舎は1918年に小学校の校長としてその職業生活のスタートを切り、1920年に視学官に抜擢されて、当時の北京郊外西北地域での初等教育の向上に力をつくした。

しかし老舎はその時期に、キリスト教会に関わりを持ち始め、1922年には視学官を辞職し、キリスト教会の活動に力を注ぐようになる。

1920年代の中国のキリスト教会は、海外からのさまざまな教派が建てたものであったが、その運営については外国人宣教師を中心とする状態から、中国人が自主的に運営する教会—自主独立教会(英語:indigenous church,中国語:本色教会)—に変えていこうとする動きがあった。

1.2. 老舎とロンドン会

そのような動きの中、1922年にプロテスタント教派の一つであるロンドン会が建てた北京缸瓦市キリスト教会で、老舎はその設立規約を起草し、教会附設の小学校の教務主任を務めるなどのさまざまな教会活動を行う。

北京缸瓦市キリスト教会は自主独立教会のモデルでもあり、老舎は宝広林(缸瓦市教会の中国人牧師)、エヴァンス(ロンドン会イギリス人宣教師 R.k.Evans、中国人の教会運営を推進)と協力して、教会の中国人による自主運営化に参加していたのである。⁽¹⁾

1.3. 老舎が北京に戻らなかった理由

老舎は、このエヴァンスの紹介で1924年に渡英し、ロンドン大学で中国語を教えながらイギリスで小説を書き始め、北京生れの北京を描く作家としてのスタートを切る。⁽²⁾

老舎は1930年に帰国後、数か月で故郷北京を離れて山東省の大学の教員と

なり、その後職業作家になってからも、戦争期の文芸界抗日協会の幹部として主に重慶で活動した。

1946年にベストセラー作家としてアメリカに招かれ、人民共和国内立後、1949年に帰国したが、その間の約20年、北京を定住地とすることはなかった。

筆者は前稿「北京缸瓦市教会と宝広林——老舎の関わった教会のその後」⁽³⁾において、老舎がイギリスから帰国後すぐに北京に定住しなかったのは、老舎がイギリスにいた1927年8月に、かつて彼が活動していた北京缸瓦市教会をめぐって大きな事件が発生し、盟友である宝広林が失脚して北京を去ったことが関係しているのではないかと推測した。

1.4. 老舎が北京を離れた理由

本稿では、老舎が渡英する前後の状況に遡り、なぜ老舎は視学官の職を捨ててまで積極的に参加したキリスト教の教会活動、特に前職を生かした教会附設の小学校の教育活動を続けずに、イギリスに行く道を選んだかについて、考えてみたい。

1.5. 本稿で検証する事柄と資料

そのため、老舎を取り巻く当時のキリスト教の活動の実態、特に自主独立教会とロンドン会との関係について、その教会学校をめぐる動きを中心に、見ていくこととする。

なお以下の考察に用いたロンドン会(London Missionary Society 略称 L.M.S.) 関係資料は、すべてロンドン大学SOAS(School of Oriental and African Studies) 図書館SCCR(Special Collection Reading Room) の所蔵である。筆者は資料収集に際し、このSCCRに長年にわたり大変お世話になった。⁽⁴⁾

また、ロンドン大学SOASのJapan Research Center (JRC)にはVisiting Scholar およびProfessorial Research Associate として受け入れていただき多大な研究の便宜をはかっていただいた。⁽⁵⁾ここに特に記し、SCCRとJRCに対し、謝意を表すものである。

なお付記すれば、老舎が渡英して中国語を教えたのはこのSOASの前身であるSchool of Oriental Studiesであり、SOASには当時の老舎の手紙や写真も保存されている。

二. 老舎と教会学校

2.1. 老舎の教育者としての経歴と教会学校

それでは、当時の老舎の経歴を見ながら、どのような形で彼が教会学校に関わっていたかを見ていこう。一.で述べたように、老舎はキリスト教に正式に入信する前は、公的な初等教育の教育者であり、行政担当官であった。そうした地位にあった老舎が、その職を辞し、教会活動に参加するようになってからは、教会が開設した初等教育の学校の教務にたずさわることになる。このことは、公教育の場で行なおうとしながらも挫折せざるを得なかった、初等教育に対する考えを、彼は教会学校という場を借りて実践しようとしていたからではないか、と筆者は考える。以下に老舎の教育に関連する経歴を列記する。(6)

- 1918. 7. 京師第十七高等及国民小学校 校長
- 1920. 9 郊外北区勸學員 (京師学務局)
 - 1.2. 教育部通俗教育研究会會員 講演股
 - 京師公立北郊通俗講演所 所長
 - 京師北郊公立講演所 所長
- 1921. 夏 京師私立小学教員夏期国語補習会 經理
西城地方服務団 (缸瓦市キリスト教会内) 附設高等小学及国民学校 教務主任
- 1922. 9 勸學員 (視学官) 辭職が受理される
天津南開学校中学部 教員
- 1923. 2. 天津南開学校 辭職
北京教育会 秘書
 - 5. 北京缸瓦市キリスト教会 主日学 総幹事
 - 8. 北京市立第一中学校 教員
灯市口地方服務団 専任幹事
- 1924 夏 缸瓦市キリスト教会 主日学 主任
 - 9. イギリスへ出国
 - 9. ロンドン着
- 1929 6. イギリスを出国
- 1930. 中国へ帰国

上に挙げた経歴のうち、下線を付けたものが老舎の関わった教会学校関連の

経歴である。その内容を理解するためにここでひとつ明らかにする必要があるのは、教会学校とは一体何かということである。

2.2. 教会学校とは何か

2.2.1. ——広義の教会学校

教会学校とは広義には、宣教師が伝道活動の一環として海外に建てた学校を指し、教会小学校から教会大学までの初等・中等・高等教育機関すべてを含んでいる。ただし、それに対する各教派の関わり方は、さまざまであった。例えば当時の北京では教会大学は各教派の連合組織であり、各教派がそれぞれ代表を派遣し共同運営にあたっていた。燕京大学もその一つであったが、老舎と共に自主独立教会運動を促進したエヴァンス牧師は、燕京大学でのロンドン会代表でもあった。

2.2.2. 会派が運営する教会学校

そのような共同参加以外に、各会派が独自に運営している教会学校があった。これは主に初等・中等教育機関であり、ロンドン会も北京に Girls' School, Boys' School と呼ばれる女子と男子の初・中等教育機関を持ち、中国名は、それぞれ萃貞女学校、萃文学校であった。この二校は土地、建物、教職員の給料、維持運営費などの経費のすべてがイギリスのロンドン会本部から支出され、北京に派遣された外国人宣教師がその運営にあたっていた。

2.2.3. 教会が運営する教会学校

このようなロンドン会の会派直営の教会学校とは別に、現地の教会が独自に運営する教会学校があった。そのような教会学校は、その教会が自主独立で運営されているという実績を示すものとして象徴的な存在でもあり、老舎が教務主任を務めた缸瓦市キリスト教会附設高等小学及国民学校は、そのような教会学校であった。この小学校は銘賢小学という名で呼ばれていた。老舎は当時、缸瓦市キリスト教会が、ロンドン会の教会から中国人の教会へ切り替わる自主独立化の活動に加わり、独立教会の規約を起草していた⁽⁷⁾が、同時にその実践の場としての教育活動にも積極的に関わっていたのである。

2.2.4. 日曜学校

老舎が関係していたもうひとつの教育活動に、Sunday School（中国語では

主日学)がある。これは日曜だけに行われる日曜学校であるが、これを教会学校と呼ぶこともある。老舎は缸瓦市キリスト教会の主日学(Sunday School)の主任をイギリスに行く直前まで勤めており、この日曜学校を児童の知識情操教育の場として改革しようとしていた。⁽⁸⁾老舎はまた、児童のための日曜学校の方針についての提言を、当時のキリスト教雑誌に発表している。⁽⁹⁾

2.2.5. 英語学校とその重要性

ここまで教会学校について述べてきたが、このほかに教会運営の学校として述べておかなければならないものがある。それは缸瓦市キリスト教会は、小学校や日曜学校のほかに、夜間の英語学校を経営していたことである。

この英語学校は、老舎と宝広林牧師が知り合った場でもであるとされているが、それより重要なことは、この英語学校から得られる現金収入を、教会の経済的自立を含む完全自立化のための重要な手段とみていたことである。このことは老舎が書いた「北京缸瓦市倫敦会改建中華教会経過紀略」の中で教会自立化の試行プラン全四項目の第一項目に英語学校の拡充があげられ、次のように書かれていることからわかる。

丙 試行

自立计划，果否实现，赖本期决定之，其计划如下：

- 一、扩充英文夜学校，以增加入款。
- 二、实行减政，以减支出。
- 三、增多捐额，—— 教友之年捐月捐。
- 四、征求教友

第二項目以降は「節約して支出を増やす」、「献金を増やす」、「信者を増やす」といったごく当然のことであるので、この英語学校の経営が缸瓦市キリスト教会にとっていかに重要であったかがわかる。

以上、老舎が関わった教会学校の経歴とその性格について述べた。その中で筆者は、老舎が当時ロンドン会の缸瓦市キリスト教会を中国人の自主独立教会にするために尽力していたこと、また老舎が関わった教会学校がその自立化の実現のために大きな役割を担っていたことを指摘した。

2.3. 老舎が教会学校に関わった時代の大きな流れと北京の実際の状況

しかしこのような教会自立化の動きは、中国人にとっては外国人の資本で基礎ができたものを、そのまま自分たちのものとして引き継ぎ、発展させていけ

るという大きな利点があるが、一方の外国人宣教師たちにとってみると、いまままで自分たちが苦勞して築いたものをそのまま差し出すという不利益がある。当時、大きな流れとしては中国教会の自立化があったのはまぎれもない事実であるが、現地では実際に自立化・中国化への移行が理想的に進んでいたのだろうかという疑問が残る。

このような疑問を解いていくためには、当時のロンドン会の派遣宣教師やイギリスの本部が、この動きに対してどのような態度をとっていたかを実情に即して明らかにする必要がある。以下、当時の北京の具体的な状況について見ていくことにする。

三. 当時の北京ロンドン会の動き

3.1. 中国教会自立化への潮流：1922年5月の上海會議と Policy for Peking

3.1.1. 1922年5月の上海會議

中国教会自立化に向けて、その理念と方法がより具体的に提議されたのは、1922年5月2日から11日にかけて上海で開かれた、第5回中国キリスト教全国大会（上海會議）においてであった。この會議が画期的であったのは、會議に先立ってテーマ別に5つの委員会が設置され、それぞれのテーマについての報告が行われ、それに則った進展が各宗派、各地域の宣教師たちに指示されたことであった。⁽¹⁰⁾

特にその中の第5委員会のテーマ：“Organization and Co-Operation”について、ロンドン会の本部はその報告で示された中国人教会への移行の原則の実行例として北京の教会を指名し、特別小委員会を設置してその原則と実際の北京の状況をまとめさせ、中国北方管区に検討を命じた。それが“Policy for Peking”と題するレポートである。⁽¹¹⁾

3.1.2. Policy for Peking

このレポートは、前半で中国キリスト教全国會議第5委員会で提示された原則と疑問点を要約し、後半に実際の北京の状況を述べ、そして参考としてキリスト教の他の宗派がまとめた移行のための細則を引用している。

この後半に書かれた北京の状況については、まず全体的状況としては、「北京での中国教会の活動は非常に先進的である。すでに完全自立独立化した旧LMSの教会があり、それに近日中に公理会、宝広林牧師の缸瓦市キリスト教

会が加わる連合組織が作られて、全国の自主独立教会運動の指導的役割を果たすであろう。」と述べ、それに対して「ロンドン会は全面的に協力していく。」ことが書かれている。

また当時のロンドン会北京地区の活動と担当者を以下のように分類し、それに対し説明と分析を加えている。

①担当分類：

A：高等教育担当：Mr.&Mrs.Taylor, Mr.& Mrs.Evans, Mr.&Mrs.Barbour

B：医科大学担当：Mager G.G.Wilson, Mr.&Mrs.B.Road, Mr.&Mrs.Jhon Cameron

C：市部および郊外の伝道活動と初等中等教育担当：Mr.&Mrs.Haward Smith, Mr.&Mrs.Dawson(陶森), Miss Wood, Miss Hancock, Miss Lenwood, Dr.& Mrs.Stuckey, Mr.&Mrs.Liddle(李徳修)

②説明：

A：に名前の拳がっているエヴァンスは、一.で言及したように老舎と関係が深く、また上記の上海会議では教会中国化推進の演説⁽¹²⁾を行い参加者に深い感動を与えた人物である。しかし当時は体調をくずし、英国帰国中であると述べられている。

B：の担当者は、すべてLMSから医科大学に派遣されている honorary members であると述べられている。またA,B二つの分野は、他の教派との共同運営でありロンドン会独自の活動ではない。

C：については、スミス夫妻は現在は賜暇中で不在であること、スタッキー博士は主に学生活動と医療活動を担当、リドゥル氏は北京の市部と郊外の伝道活動を担当しているが、スタッキー夫妻とリドゥル夫妻は今のところに天津に滞在中であると述べられている。なお、残りのドーソン氏とウッド女史(および他2女性)は、二.で言及した教会学校—Boys' School とGirls' School—の担当である。老舎はこのウッド女史が校長を務める女学校で、ロンドン大学赴任の契約書をかかわしたとしている。⁽¹³⁾

③：分析と結論

この後に「中国教会は、将来的には高等教育の責任と費用を担うか、または地区政府にそれを委ね、大学生の宗教訓練のみを行うかもしれない。しかし、現時点での中国教会の最大の関心事は初等・中等教育である。また医療活動も大きな伝道の手段である。これらは通常の教会活動や伝道活動とともに、キリスト教全国大会の報告に沿って中国教会への移行を進め

ていくべきである。」と述べ、ロンドン会が費用を負担する宣教師についても、どのような形で中国教会が責任・管理を担うかなどを具体的に述べている。

3.1.3. Policy for Peking から見えてくるもの

つまり結論からいうと、初等・中等教育および教会・伝動・医療活動を移管していくべきとしている。このように初等・中等教育の移管について明記するのは、逆にいうと、それについてはロンドン会独自で運営する教育機関を持っていることからして不思議ではない。しかし不可解なのは、それとともに移管すべきとする伝道活動等が、C：についての説明を見る限り、実に手薄であり、現時点ではロンドン会の担当者が一人も北京にいないことである。

このような空白状態に対し、中国北方管区幹部会議では、北京缸瓦市教会の中国人牧師である宝広林に、北京郊外の伝道活動も兼務させようとする動きがあった。⁽¹⁴⁾ また幹部会議はこれに関連して、宝広林の地位と仕事に関する報告を北京支部の特別委員会に出させた。⁽¹⁵⁾

以上が“Policy for Peking”の内容とそれに付随する問題点である。では、これについて検討するようロンドン会本部から命ぜられた現地支部は、この“Policy for Peking”に対してどのような反応を示したのだろうか？以下それを見てみよう。

3.2. Policy for Peking に対する現地の回答：

1923年7月の中国北方管区会議と“Peking Policy”

3.2.1. 1923年7月の中国北方管区会議

中国北方管区責任者のスタッキーは、1923年7月に行われた管区会議の議事録をロンドン会本部に送った。その議事録には、本部からのレポート“Policy for Peking”に対する正式な回答が採択されたことが書かれ、その回答は付随文書12に“Peking Policy”と題して付けられていた。⁽¹⁶⁾

3.2.2 “Peking Policy”

その回答の主な論点は3つあり、第一は、すでに中国教会の伝道活動と初等教育にロンドン会の助成金を出しているので、本部の指針に沿った中国教会への移管はかなりの程度行われていること、第二は、その責任の移管をさらに進めるには受け皿として教会連合組織が必要であること、第三は、中等教育と医

療活動は、まだ移管する時期ではないということである。

第一に述べられている助成金は、缸瓦市キリスト教会牧師である宝広林と教会が運営する教会学校に、助成金を出していることを指している。第二の教会連合組織は、“Policy for Peking”の北京の現状についての報告の最初に述べられている連合組織のことを指すが、この回答の段階では、まだその組織ができていないことがわかる。第三では、“Policy for Peking”で「移管すべき」とされている中等教育・医療活動を、「まだ移管すべきではない」としている。

このような現地の反応を一言でまとめると「やるべきことはすでにやっているし、それ以外のことは中国側の条件がまだ整っていないのでまだやることはない」とあまり積極的でないことがわかる。さらに、スタッキーは議事録に付けた手紙の中で、この“Peking Policy”についてさらに詳しい説明を加え、次のように述べている。⁽¹⁷⁾

3.2.3. 議事録に付けられたスタッキー氏の手紙

「ロンドン会北京支部、幹部会、中国北方支部は、ロンドン会本部からの指示を検討したが、やはりここでは今、我々が権限と責任を、すべて一律に中国側に移譲するのは適当ではないと考える。北京地区教会の運営は、あまりにも一人の人間—宝広林—に頼りすぎている。我々は、ロンドン会現地支部と宝広林（彼の活動を含む）との関係がどのようであれば最もよいか長時間議論した。その結果、まず北京の教会の連合組織の結成を強く促すこと、そして宝広林がその連合組織の中におのずと自分の位置を見つけるのがよいと結論した。」

つまり、これは今ここですべてを移管してしまうには、まだ宝広林を中心とする北京中国教会とロンドン会の関係に不安が残るので、間に連合組織を入れようとしていることが推測できる。

またさらに「宝広林に対しては、Wood女史が戻ったら友人として温かい助言をしてもらうのが、直接ロンドン会等の組織から指示するよりずっとよい。」とし、Wood女史以外に、宝広林に直言できるものが誰もいないことがわかる。

実はWood女史は、この一年間(1922.7.19—1923.8.8.)賜暇によりイギリスに帰国し、北京にはいなかった。⁽¹⁸⁾ 筆者は先に1.において①C:の伝道活動担当の北京スタッフがいないことを指摘したが、さらに初等・中等教育活動担当のウッド女史も不在であったのである。そうすると、ロンドン会スタッフの空白化はもっと進んでいたことになる。

以上、このような北京スタッフの空白とその補充措置、および教会自立化をめぐって、宝広林とロンドン会が微妙な関係にあったことが、これらの文献からも見てとれる。

3.2.4. 老舎が教会に関わった時のロンドン会と宝広林の関係

筆者は前稿⁽¹⁹⁾では宝広林とロンドン会の関係については、宝広林が1927年に失脚するまでは良好であったと考えていたが、今回さらに資料を調べてみて、1923年の段階ですでに両者の関係には何らかの問題が生じていたことがわかった。これはちょうど老舎が宝広林とともに教会活動を行っていた時期にあたる。

3.3. 北京スタッフの不足と宝広林に対する批判：宣教師たちからの手紙

3.3.1. スミス氏の手紙 1923, 11, 12

この北京スタッフの不足は、現地ロンドン会の宣教師自体も強い危機感を感じていた。それは、1. ①C：の伝動活動担当で、賜暇中のスミス氏がロンドン会本部あてにあてた手紙⁽²⁰⁾にも表れている。スミス氏は「北京には27年前に4人もいた宣教師（男性伝道師）が、現在一人もいなくなってしまった。しかし今は宣教師活動の責任・管理を中国教会に移管する最も重要な時期であり、今こそが宣教師と中国教会との十分な協力が必要とされている。そのように重要な時期であるにもかかわらず、このような空白状態が続いているのは、極めて異常な事態である。」とし、「自分の出した定年退職願いを撤回するから、移管の目途がつくまであと3年北京で働くことを許可して欲しい」とまで述べている。

3.3.2. スタッキー氏の手紙 1923, 11, 27

また、同じく1. ①C：に名前があり、また北方管区責任者でもあるスタッキー氏も、本部あて天津からの手紙の中で、北京の伝道スタッフ不足は最悪の状態であるのに、医科大学の同僚にさえ理解されず、また大学のスタッフは場所が市内の教会から遠く、仕事が忙しくて教会の仕事を手伝えることができないと述べている。⁽²¹⁾

3.3.3. リドゥル氏の手紙 1923, 12, 7

また、1. ①C：の伝道活動担当のリドゥル氏は、やはり天津から本部あての

手紙で「自分は天津の市内及び郊外、北京の郊外担当とされているが、これでは忙しすぎて満足な活動ができないので、2人の若い宣教師を派遣してもらいたい。その一人を天津郊外担当、一人を北京郊外担当にしてもらえれば、私は天津市内の活動に専念でき、宝(広林)氏は北京市内の活動に専念できる。」と書いている。

3.3.4. ミーチ氏の手紙と宝広林批判

さらに永年にわたり北方管区の責任者を務め、辞職してから北京に来て宣教師の仕事を手伝ったミーチ氏は、やはり本部にあてた手紙⁽²²⁾で北京の状況を以下のように述べている。

「北京にいるロンドン会の宣教師のうち、テイラー、バーバー氏(1.①A: 高等教育担当)やキャメロン、ウィルソン氏(1.①B: 医学大学担当)は、仕事の関係から缸瓦市教会から遠いところに住み、大学の仕事に忙しい。近くに住むドーソン氏はBoys' Schoolの仕事で手一杯であり、女性宣教師はGirls' Schoolの仕事にかかりきりになっている。結局、このような教育機関以外で、伝道活動をしているスタッフは誰もいない。

それで私は、これらの伝道活動は、すべて宝広林氏がやることになっていることがわかった。しかし、私はこの缸瓦市教会が関係する地区の伝道活動を、どこにも見つけることはできなかった。そこでは学校活動や女性の職業教育が行われ、夜間は多数の英語の授業が行われていた。日曜日には日曜学校の前に朝の礼拝があった。しかし貧者やそこに集まる人たちのために、福音を説くことはなくなっていた。北京の北郊外も宝広林氏の担当であったが、彼は市内での仕事に忙しく、少しの時間しか割けない状態であった。南郊外は宝広林氏によると天津(スタッフ:リドゥル氏)の担当ということであった。

宝広林氏の教会に対する考え方は、私にとっては今までに聞いたことのない新しいものであった。彼は自分は教会の牧師ではなく、運営責任者であるというのである。私は彼の出している週刊誌に、彼の共同編集者が教会の役員についての考え方を載せているのを見つけたが、それによると“一つの教会には、一般的な仕事を行う運営責任者が必ず一人は必要であるが、牧師は複数の教会に一人しか必要ではなく、その一人の牧師が順番に教会を回ればよい、またすべての教会の通常活動、礼拝・洗礼・聖餐・信徒訪問・日曜学校等々は、担当の信徒が行えばよい”というのである。

宝広林氏が缸瓦市教会に対してこのような考え方を持っている限り、彼がわ

れわれ宣教師と連携してやっていくという本来の職務に適任であるとはとても言い難い。

少なくとも私自身はこう考えているが、他の宣教師たちはこのような事態を正確に把握していないようである。

彼はすべての給料をロンドン会から支給されいながら、少しもロンドン会とは連携せず、自主独立を標榜する教会の単なる“運営責任者”にすぎないのである。私にとってこれらはすべてのことが極めて異常であり、この状態を正常に戻す何らかの措置をとるべきである。」

このミーチ氏の手紙から、当時ロンドン会と宝広林氏の間が生じていた問題の一端を知ることができる。

では、このような状況に対して、ロンドン会本部は一体どのように対応したのだろうか？また、そのような本部の対応に対し、現地支部はどのように反応したのだろうか？以下それについて見ていくこととする。

3. 4. 批判に対するロンドン会本部の措置とそれに関する現地の対応：

1924年2月の中国北方管区会議と Peking Report

3.4.1. 批判に対する上部組織の対応

ミーチ氏の手紙に代表される宝広林氏への批判は、当時すでにかなり大きくなっていたらしく、中国ロンドン会の管区代表者委員会でも宝広林氏に対し、「缸瓦市教会での英語学校を廃止し、北京郊外地区での伝道活動を担当する」という勧告が出された。⁽²³⁾ それを受けて本部は、北方管区あてに「宝広林氏のロンドン会および缸瓦市独立教会に対する仕事に関する手紙」を送った。その中で上記の他に缸瓦市教会の財政的独立に対しても疑問点を示した。⁽²⁴⁾

3.4.2. それに関する北方管区会議の対応

北方管区会議は、この問題を検討するために出された「宝広林氏に関する報告書—Peking Report」を会議で採択し⁽²⁵⁾、この問題に対し「我々は英語学校のクラスを増やすことを除いて(その理由は、英語学校の経営が、宝広林氏の教会と執筆の仕事に専念する時間を削ることになるためであるが)、宝広林氏の活動の自由を妨げるつもりはない。」と決議した。

また、それ以外に宝広林氏を北京支部会議の正式メンバーとすることや、宝広林氏の特別給与支給をもう2年延長する要請も決議した。⁽²⁶⁾

このような対応は、宝広林氏に対してかなり譲歩しているように見える。しかし、これは、「英語学校のクラスを増やさない」という制限を加えた点で、

かなり本部の意向を考慮したものであった。なぜなら「Peking Report」の内容は、本部からの指示をほとんど受け入れず、前述の批判に対し真っ向から反論するものであったからである。以下その内容の要点を述べる。

3.4.3. Peking Report

本部からの手紙に対する回答の要点は以下の通りである。

1. 宝広林氏は、ロンドン会の北京郊外地域に対する責任を引き受ける。しかし、英語学校については、それを経営しなければ缸瓦市教会のほかの活動に回す資金が不足し、その活動に支障が出るため、それを放棄することはできない。
2. 宝広林氏は、ロンドン会から受けている給料の補助金に十分値する次のような活動をしている。

教会活動：日曜礼拝、日曜学校(15クラス150人)、聖書読書会(子供および成人クラス)、母親学級、家庭訪問、学生ボランティア活動、貸出図書館の企画、近隣商店主を宗教映画に招待、英語学校の2人が入信。

地区活動：小学校(6クラス、生徒150人、教員5人、授業料・教科書は無料、1年間の経費は1500ドル)、職業学校、公衆衛生・蠅撲滅運動、無料予防接種、貧民救済事業、人力車夫の実態調査、子供の遊び場作り。

郊外活動：1923年秋、伝道活動者、リドゥル氏、マレー氏と冬の計画を練る。

郊外北半分を担当し、村の教会と市内の教会を結び支援した。

秋、郊外の4つの村で伝道活動、青年伝道者の協力を得る。

これらの活動については費用を一部負担の見込み。市内と郊外の教会を連携させたことが、後に繋がる大きな成果である。

対外活動：宝広林氏は北京キリスト教界で大きな力を持ち、大学生・青年伝者を指導しているだけでなく、教会で働く老年人からも尊敬され、The Federation of Christian Churches in Pekingの議長となった。彼は教会連合組織の結成に熱心であるが、若年層と老年層の考えの違いで結成が遅れている。しかし彼は人材の有効活用のためにL.M.S.の教会と自主独立教会が連合することを望んでいる。

宗教論文：宝広林氏は実務能力に優れている。彼の意見は「真理週刊」と一

致しているし、それを北京の関係者とも共有しているので、あまり書く気はない。彼は「真理週刊」のことを、若者に先進的の神学論を発表させ、新旧の分裂を防いでいるので7割方建設的と考えている。彼の考え方はこのように視野が広い。

3. 宝広林氏とロンドン会の関係で憂慮すべき点:

彼は現在ロンドン会宣教師と同僚となるような地位と責任を試験的に与えられ、市内の教会と郊外を連携させる重要な仕事をしているのに、一緒に働く宣教師が誰もいない。スミス氏は帰国し、リドゥル氏は天津に、エヴァンス氏はイギリスにいる。この一番大切な時にロンドン会との関係が欠けている。彼には北京で働くロンドン会宣教師の同僚およびロンドン会支部会議への参加権が直ちに与えられるべきである。

4. 本部の提起した缸瓦市教会の経済的自立について:

缸瓦市教会の運営はすべて信徒から選ばれた委員会によって行われており、運営的には自立している。信徒の一か月80ドルの献金と英語学校の一か月200ドルの収入がある。経済的には完全自立ではないが、すでに多くの責任を引き受け、多種多様な活動を行っている。現段階では経済的な自立は最重要ではなく、これを強制しないほうがよい。

5. 宝広林氏はあらゆる点で優れており、彼しかできない仕事をしており、北京のキリスト教界でも特別な地位にある。そのため、彼の給料への特別補助をもう2年延長することを強く望む。

以上が本部への回答用に使われた Peking Report の内容である。⁽²⁷⁾ この内容や決議をどのように考えるかは別にして、次にこの議事録につけられたスタッキー氏の手紙を見てみよう。

3.4.4. 議事録に付けられたスタッキー氏の手紙

スタッキー氏は当時中国北方管区の責任者であり、会議の議事録は彼から本部に送られ、それには常に会議の概要を説明する手紙がつけられており、この手紙により会議の実態をより正確に把握できる場合がある。そこには宝広林氏をめぐる議論についてこのように書かれている。⁽²⁸⁾

「確かに宝広林氏のやり方は、管区代表者委員会や本部の考えるものと少しずれている。しかし彼はやはり経験豊かなすぐれた人物であり、市内の教会と郊外との連携を非常に気にかけていることは確かである。」

「彼をどのように我々ロンドン会と連携させるかは、頭の痛い問題である。彼を我々の北方管区会議、北京支部会議でさえも、そこに参加させることは、却って彼を中国人の同僚から孤立させるので、よくないと考える人もいる。」
「北京支部は彼を北京支部会議に出席させることを主張し、我々は少し躊躇しながらも、これに同意した。」

「彼の孤立はやはり問題であるが、いろいろな事情で宣教師の補充ができないので、これを解決するにはやはり上海から誠静怡(敬一)氏(中国独立教会の有名な指導者で北京の独立教会にいた。当時は上海で活躍)を呼び戻し、古い正統的神学派と新しい神学派の架け橋となってもらうのが一番良い解決方法だが、彼の給料をL.M.S.がどのように負担するかはまだ明確でない。」

この誠静怡氏に対し、ロンドン会は彼を北京に呼び戻すべくさまざまな働きかけを行ったが、結局これは最後まで実現しなかった。

以上、宝広林氏と当時のロンドン会との関係を述べたが、ここでもう一度ロンドン会の教会学校に主題を戻し、当時どのようなことが起こっていたかについて見ていくこととする。(以下次号に続く。)⁽²⁹⁾

注

- (1) 老舎とキリスト教(渡辺安代と共著) 雑誌「中国語」1983.6月号参照。
- (2) 老舎の文学とキリスト教(1)、(2) 上智大学外国語学部紀要18号,19号(1984,1985)参照。
- (3) お茶の水女子大学中国文学会報20号(2001)
- (4) 老舎研究会報第21号拙稿【ロンドン通信】イギリスのお墓(2007.9.1)でも言及。
- (5) *JRC News* (January 2009, Issue 58) p.14にも拙稿を掲載(Their Final Resting Place)。
- (6) 老舎年譜(『老舎全集』第19巻 人民文学出版社、北京1988,pp120-140)に拠る。
- (7) 北京紅瓦市倫敦会改建中華教会経過紀略『中華基督教会年鑑』第七期(1924) 上海
- (8) 『老舎の関坎和愛好』(舒乙)中国建設出版社(1988)の四、老舎早期年譜に拠る。
- (9) 児童主日学與児童礼拝設施之商榷『真理周刊』16,17,18,21期(1923.7.15,22,29,8.19) 北京
- (10) *The Chinese Recorder*(1922.6, Shanghai) 掲載の以下2本の紹介に拠る:The

- Chinese Church Comes of Age—The China National Christian Conference— ;
Some Other Important Resolutions—The National Christian Councils—.
- (11) North China District Committee , Policy for Peking (CWM/LMS Overseas material, Miscellaneous, Notes on general LMS policy in China 1920-35 Box 8)
 - (12) Church of Christ in China (Conference Address) *The Chinese Recorder*, 1922.6
 - (13) 1926.6.6 付老舎のロンドン大学秘書 Clegg 女史あて手紙の中で言及。
 - (14) 1922.11.22&23 Minutes of Executive Committee of the North China D.C. (CWM/LMS North China, Incoming Correspondence Box 23)
 - (15) 1923. 2. 3 Minutes of Executive Committee of the North China D.C. (同上)
 - (16) 1923.7.23 North China District Committee Minutes of the Annual Meetings (同上)
 - (17) 1923. 8. 6 Stucky to Hawkins, letter, 注(15) の議事録に添付。(同上)
 - (18) Register of Missionaries, Deputation, Etc, 1796-1923 (L.M.S. 1923, London)
 - (19) 「北京缸瓦市教会と宝広林——老舎の関わった教会のその後」注(3) と同じ。
 - (20) 1923.11.12 Smith to Hawkins (CWM/LMS North China, Incoming Correspondence Box 23)
 - (21) 1923.11.27 Stucky to Hawkins, letter, 1923.11.23&24. Minutes of Executive Committee of the North China D.C. に付けられた手紙2通のうちの1通。(同上)
 - (22) 1923.11.22 Meech to Hawkins, letter, (同上), なお湯農光氏は「老舎の早期活動与伦敦会」(民族文学研究 2005 第二期) でミーチ氏を女性としているがこれは誤りである。
 - (23) Advisory Council の決議: A.2103, 注(25) の Peking Report に引かれている。現物未見。
 - (24) 本部責任者 Hawkins の手紙: 9841, これも(25) の Peking Report に引かれている。現物未見。ただ現在残っている Hawkins: 9844 の手紙の日付が 1923.11.14 であることから、9841 は同日か少し前に書かれたものと思われる。
 - (25) Minutes of North China District Committee (1924.2.4-7), Appendix 7 Peking Report (CWM/LMS North China, Incoming Correspondence Box 24)
 - (26) Minutes of North China District Committee (1924.2.4-7), (同上)
 - (27) この内容は 1922-23 年に宝広林氏自身が書いた缸瓦市教会の活動報告とかなり共通している。注(20) の拙稿参照。
 - (28) 1924.2.12. Stucky to Hawkins, Letter, (注(25) と同じ。)
 - (29) 紙幅の関係から、以下の四、五、六章は次号に回すこととした。

四. ロンドン会教会学校移管の動きと宝広林

五. 1925年11月のウッド女史から本部への手紙：教会学校登録法と缸瓦市教会の要求

六. 結論

(上智大学)